

① NPO 法人みらいず works(新潟県) 角野 仁美  
インタビュアー 関 福生

## ～自分のあり方を考えてみると～

関—8年前のこの会で発表していただいた角野さん、今回は彼女のライフストーリーを聞いてみたい。

—岐阜県の生まれ。私の住んでいる地域には子ども会がなかった。小学生のとき、諦めきれず、他の地域の公民館に行っていた。地域の人のかかわりがとても温かかった。

関—浦崎太郎さんとは高校生のときに出会ったのですか。

—小3の時からずっと教員になろうと思っていた。高2のときに、浦崎先生に出会い、自分らしいあゆみをしたと思うようになった。学校の中だけでは出来ない、子どもたちの育ちについて考えるようになった。先生には、「君はどこからきてどこに行くのか考えろ」と言われた。みらいずとの出会いも先生から。高校生から活動を開始、大学もみらいずのある新潟大の学に進学した。いろんな人をつないで、つながっていくスキルを身につけたいと思っていた。4年間、企業でアルバイトという修行をして、思いは強く、みらいずでやろうと思った。分かったことは、ふるさととは自分でつくるもの、同級生を集めて、みんなでする。

関—これからの人生は

—夢がいっぱい。もっといろいろな人とつながりたい。ヨーロッパに行ったときに思ったことがある。「起こるべきことが起こる」と。今までの人生も、自分を信じて自分で選択してきたから仲間とともに進むことができたのだと。



②愛媛大学教職大学院 中尾ゼミ 善家 瑛徳・新宮 美月・坂本 鈴佳・神野 哲汰  
インタビュアー 中尾 茂樹

## ～新しい教育のかたち～

これから教員になる人たち、学校の外で学ぶことがたくさんある。学校サイドから考えてみた。

—9月、東北の被災地に行った。津波の被害、石巻の大川小学校では、防災の正しい知識があれば、たくさんの助かる命があったことを痛切に感じた。木で作られた慰霊碑を見て、人々の心がこの災害を忘れないための工夫だと聞いた。学校と地域で、防災のことについて正しい知識を共有しなければと思った。

中尾—慶応大学とタイアップして、新しい避難訓練を検討している。例えば、学校で行われている一過性のプログラムではなく、危険は常に起こりうることを想定して、5分でもいいから、頻繁にしたほうが良いこと、また、地震が起こったときなど、耐震性の意味からしても一番安全な場所は学校であることなど。

—また、閉校となる愛南町の長月小学校へ行き、運動会のサポートをした。運動会前日から参加した。パン食い競争等、地域の人と一緒に楽しんでいた。

—運動会、どのような準備をしていいのかわからなかった。でも、地域と学校のつながり、地域と地域のつながり、教員同士のつながりなど、とても強いと感じた。

—東温市の川内中学校で防災訓練をした。実際の地震では、マニュアル通りにはできない。子どもたちとどうすれば、自分の命が守れるか、話し合っていきたい。新しい防災の形にもチャレンジできるように。



回し人 舟田 美加

## お題: どうする地域教育

まずは、地ならしのアイスブレイキングタイムから始まった。愛媛県の特産やイメージするものをそれぞれが書き出だす。他者と共有し、自分と同じであれば OK。なかなか感性が合わず苦戦する人もいたが、緊張の糸がほぐれて、和やかな雰囲気となった。



おでん∞caféとは、world café方式で、参加者に語りやすい場を提供し、いろいろな具材（人）を一緒に煮込むことによって美味しくなるおでんのような旨み（ヒント）を持ち帰る。

今年のファシリテーターは、NPO おのみち寺子屋から参加の大学生と青学の学生、若い力にお願いすることになった。

- ・教育だけではなく、地域の課題に向き合ってくれる地域コーディネーターの必要性。
- ・後継者づくり。誰にも相談できない子どもに寄り添う活動。
- ・子どもをまん中にして、その回りに大人がいる社会。「子どものために」だけではなく、その活動の中に自分を織り交ぜていく。みんなが自立してお互いに助け合う。
- ・多様な人との集いに参加することによって、自己を確立する。子どもを中心にして、自分たちなりの楽しみ方を模索する。「ありがとう」は最大のキーワード
- ・地域教育は、熱い思いと誇り。でも、気持ちだけでは意味がない。行動力が必要。ボランティアをすることに前向きにはなれない。どうすればいいか。憧れの人を見つけ、楽しむ気持ちを持つ。自分が入っても大丈夫という安心感がある。いろいろな大人のサポートがあって、新しい気づきが生まれる。
- ・地域を巻き込むために、高校生等がかかわり次世代の形にしていく。すぐする地域教育は大事。「すぐする」ことは、学校に認められないことが多いががんばる。
- ・具体的な企画を考える。

等、いろんな意見が出た。10代、20代を中心に200名ほどの人が集まり、地域教育の新しいかたちに向かって1歩前進したようだった

とにかくやってみる、動いてみる。仲間に「どうする地域教育」と言えるように。

